



会員 横堀 真美

子ども担当弁護士として

はじめに

私は、法テラスのスタッフ弁護士であり、現在、菊地総合法律事務所において養成を受けている。カリヨン子どもの家に入所した子どもの人権擁護活動の経験について書かせていただくこととした。

カリヨン子どもの家の入所者

母親と兄がいるが、事情があって施設に入所しているMは、施設職員とのトラブルで施設を飛び出してしまう、カリヨン子どもの家に入所していた。私は、Mの子ども担当弁護士として、施設との関係調整等を行うことになったのである。

担当児童福祉司の全面的な協力のおかげで、施設との調整はスムーズに進んだが、問題が残った。カリヨン入所の1週間後に、1年半ぶりに母親の元に5日間帰宅することが決まっており、冷却期間を置いてスムーズに施設での生活を再スタートさせるため、母親に一時帰宅を受け入れてもらう必要があった。しかし母親は、今回の件を無断外泊と考え、罰として帰宅の受入を1日に限ると施設側に告げてきたのである。

初めてぶつけてくれた本心

Mは、雑談はいくらでもするのに、今後彼女自身がどうしたいか、という話になると、「別に」「どっちでもいい」等投げやりな言葉しか口にしない。

しかし、本来の帰宅予定日の前々日になって、母親が「帰宅は1日だけ」と話している旨伝えると、彼女は、「自分が頑張って成長したことは1日だけでは伝わらないから、1日だけだったら帰らない」ときっぱり言い切った。そして、今まで母親と一緒に暮らせないこと等をずっと我慢して普通の家族のように暮らせるよう頑張ってきたのに、それを母親は見ようとしてくれない、

と堰を切ったように話し始めた。最初私は、今後の母親との関係を考え、1日だけでも帰るようMを説得しようとした。しかし、電話の向こうで、半ば泣き叫んでいる彼女と会話しているうちに、それはできなくなった。初めてぶつけてくれた彼女の本心は重く、今後のためにその気持ちを抑えろなどとは言えなかったのだ。

そうは言っても、全く帰宅を拒めば母親との溝が広がってしまう…悩んだ挙句「あなたが聞き取ったことをお母さんにそのまま伝えてご覧下さい。それで駄目なら仕方ないから、横堀先生、どこか遊びに連れて行ってあげて」という、坪井節子弁護士のアドバイスに従い、思い切って母親に電話をかけた。そして、1時間程かけて彼女の言葉をそのまま伝えた。

翌日、Mの母親から4日間の帰宅を受け入れる旨連絡があった。そして、カリヨンから待合せ場所まで付き添って行った際、Mの母親は、「お電話で聞いたことは、心に留めてMに接しようと思います」と言ってくれた。

大切な依頼者との信頼関係

今回は、たまたま彼女自身の言葉を伝えたことで母親が心を動かす、という良い方向に転んだが、母親との関係が悪化してしまう危険もあり、その確率は五分五分だった。それでも、「Mのためを思って」Mの気持ちを無視していたら、最悪の結果は避けられたとしても、私はMの信頼を失っていたと思う。

母親との待合せ場所に向かう電車内でMが言ってくれた、「ほんとに助かったよ」という一言が、嬉しかった。迷ったときには現状を丁寧に説明し、依頼者の気持ちを丁寧に聞き、一緒に解決方法を探る、という姿勢に戻って、依頼者との信頼関係を大切にできる弁護士になりたい。